

2009年6月 子育てのつどい 講師：親野智可等（おやのちから）

「しかる」→ 国語辞典では「強く注意する。叱責する。」という意味。

「しかる」必要がある場合 → 命にかかわる場合、人間的に許せないことをした場合など。

日常的に「しかる」のはよくない。

日常的に「しかる」2つのマイナス点

- ① 自分に自信がなくなる（ダメダメシャワー）
- ② しかる相手に対して不信感を持つ

言葉の持つイメージは絶大！！

（例えば）「梅干し」という言葉を何回か聞くと、唾液がたくさん出てくる。

→ 頭の中にはコントロールできない部分があるということ。

「親は自分のためにしかってくれているんだ」ということはわかっているが、頭の中でコントロールできない部分があって、親に対して不信感を持ってしまう。

（実際の話）

学校で、それぞれ親に書いてもらった手紙（その子が生まれたとき、どんなにうれしかったか、そしてその子がどんなに大切か、などの内容）を各自読むという授業でのこと。子どもたちはそれを何回も何回も読むのだそうです。そして感動して泣きだす子がたくさんいるということです。その中で一人の女の子が先生のところにきて「私、今日始めて知った。おかあさんが私のことが好きだってこと。」と言ったそうです。

→ 親は子供に愛情を持っていても、子供には伝わっていないことがある。

なぜ「しかる」ことに頼るのか？

- ① 親であることに甘えている
- ② 「鉄は熱いうちに打て」の言葉を誤解している
 - 【小さいうちは、英語や運動がすぐできるようになる】
 - 乾いたスポンジが水を含むようなことと同じ。
 - 【苦手なことを直す】
 - 反り返った板をまっすぐにするようなことと同じ。（根気がいる）

この2つの意味は全く違う。

「苦手なことを直す」のは、本人の強烈な内面的モチベーションがかわったときでないと直らない。大人のほうが苦手なことは直しやすい。

子どもは苦手なことを直すのは苦手！！

しからなくても自然にできるようになる環境とシステムを作る。

しからないシステム（具体例）

- ① お箸と一緒に歯磨きを置く。もし歯磨きができればほめる。
- ② 1日1回お片づけタイムを作る。1日5分、毎日必ずやって、できたらほめる。
- ③ 写真を活用する。毎日自然に目につくところにはる。兄弟仲良くしている写真、あたたかい家族に囲まれている写真、その子が頑張っている・努力している・達成している・輝いている写真など。
→ 無意識の根底部分によいイメージが培われる。

何か問題が起こったとき、しかって済ませるのではなく、合理的な工夫の方法を考える。親がこのような姿勢をみせていると子どもも自分で考えて工夫して問題を解決していく人間になる。

しからないシステムの成功率は50%以下

↓

改善策を考える

↓

それでもダメなら

↓

あきらめて目をつぶる！！

目をつぶれる親 → 子どもは笑って安らかに生きられる。

目をつぶれない親 → 子どもを傷つける。

意外と自分のことは目をつぶっている

しかるエネルギーをほめることにそそぐ。

（親はほめているつもりでも、子どもはあまりほめられていると思っていない。）

ほめ方のポイント

① 子どもが熱中していることをほめる。

→ さらに深められるように援助する。(子どもは本を買う経済力も、一人で見に行く行動力もないため、親の手助けがないと深められない。)

→ 熱中体験が子どもをのぼす。(自分が好きなことを自分で見つけられる。深め方、広め方、楽しみ方のノウハウを知るようになる。)

② しつけないことと取りあえずほめる。

→ 目を皿のようにしてほめるところを探す。

→ 事実が全くなくてもよい。(3人に言われるとそんな気分になる)

→ (例えば) 朝、会社に着いて、

一人の社員「Aさん、今日は顔色が悪いですね。」

Aさん「元気ですけど。」

二人目の社員「Aさん、暗い顔してるけど大丈夫？」

Aさん「え、そうですか？大丈夫ですよ。」

三人目の社員「Aさん、具合が悪そうですね。」

Aさん「おかしいなあ。風邪でも引いたのかなあ・・・」

「このごろしっかりしてきたね。」など。

同じ内容をチーム(親、祖父母、先生など)でほめると効果的。

③ 一歩さがりではほめる

→ 親は一歩先をみているので、一歩戻ってみる。

かけっこで遅くても、走れるだけでもすごいこと。ありがたいと思う。

④ 短所言い換え法

→ 宿題をギリギリにならないとできない = 神経が太い

ほめるシステムのシステム化

1日1回ほめる。

時間を決めてアラームをセットする。

これくらいしないと難しい。

子どもにとって、安らかな毎日の生活が大切！！

- ・自分がいていいんだ。
- ・自分は受け入れられているんだ。
- ・親は信頼していいんだ。

「受容」と「共感力」

(歯医者さんでのお話)

待合室で長い時間待っている親子。

子ども「もう帰りたい。おなかがすいた。」

親「何言ってるの。帰れるわけないでしょ。まだ終わっていないんだから。」

子ども「やだー、帰るー。」(騒ぎ出す)

→ ここで帰ってはいけない。ここで帰ったら甘やかしになる。

親「ほんと、もう帰りたいね。ママもおなかがすいたわ。いつまで待たせるのかねー。ほんと、早くしてほしいね。」などなど。

Yes, Yes, Yes, Yes, Yes, Yes, But No.

Yesをたくさん言ってからNoを言うとよい。